

兎の結末

鬼の結末

柏原兵三



文藝春秋刊

著者略歴

昭和8年千葉市生れ。36年東京大学大学院修士課程（ドイツ文学）修了後、38年から40年までベルリン自由大学に留学。43年『徳山道助の帰郷』で第58回芥川賞を受賞。現在、明治学院大学助教授。現住所 東京都文京区西片町2丁目77号

兎の結末

昭和四三年四月一五日 第一刷

定価四五〇円

著者 かしわばら ひょうぞう
柏原兵三

発行者 上林吾郎

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
TEL(二六五)三二六代表

印刷所 大日本印刷
製本所 中島製本

※万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

目次

鬼の結末	5
幼年時代	97
バルトン湖	145
カールスバートにて	189
あとがき	223

鬼の結末 「NEUE STIMME」五号 昭和四十一年七月

幼年時代 「文學界」 昭和四十三年三月号

バラトン湖 「三田文学」五四卷六号 昭和四十二年六月

カールスバートにて 「形成」二十九号 昭和四十二年十二月
「新潮」 昭和四十三年三月号 転載

兎の結末

カバ1・扉装画 著者

兎の結末

第一章

兄と僕の二人の勉強部屋と寝室を兼ねている洋間は、和風の母屋と廊下でつながっている洋館の一番手前にあった。母屋からその廊下を伝わって来ると、つきあたりの白い壁に懸っている大きな楕円形の鏡が、歩いて来る者の上半身を映し出すようになっていた。

祖父母の家に僕が移り住むようになってからしばらくするうちに、この鏡が僕をその前に必ず釘づけにするようになってしまった。母屋から廊下を渡って来るたびに、僕は鏡の前に吸いつけられ、鏡に映った自分の顔と対峙し自問自答を演ずるのだ。

——僕には恋をする資格があるだろうか。どこかに女の子を惹きつけるような魅力があるだろうか。

——ないことはあるまい。眉毛は太くて濃く男らしい。君の目は澄んで光っている。いかに頭がよさそうだ。

——それから？ たとえば鼻の恰好はどうだ。

——余りいいとはいえないけれども、そんなに悪くはないだろう。

——口の形はどうだ。

——そうだな、少し唇が厚くて大きいけれども、この方があるいは重厚な印象を与えるかも知れない。

——耳は？

——大きくていかにもたのもしいなあ。

——洋服はどうだろう。

——そこまで来ると駄目になってしまふのだった。僕の着ている服と来たらお話にならなかったからである。

それは学校に割当てが来た配給服だった。割当ては何回かあったが、そのたびごとに生地や色、また附属品の類が違っていた。その配給服はクラスで僕を含めて三人がくじであてたのに、まだ着ているのは僕だけだった。それ程その回の配給服は質が悪かったのである。色はカーキ色だったが、馬糞を連想させるような何ともいえない嫌な色合なのだ。生地は着一週間と経

たないうちにピカピカに光沢を生じ、皺が方々に寄って来た。そして洗濯を一度してからというものは服全体がダランとしてしまい、いくらアイロンをかけても、もうどうにもならなかった。しかし一度配給服にあたった者は、その後割当てが来ても、棄権しなくてはならないきまりになっていたので、僕はその服に甘んじるほかないのだった。その服があたるまで着ていた純毛の紺サージの服はとうに弟に下っていたし、そうでなくてももう小さ過ぎて着られなかったに違いない。闇市か物々交換所でもっとましな服を手に入れることは可能はずだったが、そんな余裕は家になかったし、あったとしても、もっといい服を買って欲しいという僕のたのみが採り上げてもらえる見込みはなかった。男の子が服装のことをとやかく気にするのは恥ずべきことだという哲学が家には厳然としてあったのである。僕自身この哲学を信奉していたのだ。にもかかわらず僕にはその配給服が気になってしかたがないのだった。

——この服が内田のような純毛の黒の学生服だったらどんなにいいだろう。そうしたら僕はどんなに凛々しい少年に見え、朝よく駅で逢う少女の心をどんなに惹きつけることが出来るだろう。

——ああしかし駄目だ。こんな服では。

——いやそんなことはない、大事なものは外面ではない、衣裳ではない。大事なものは内面であり、その内面に支えられた容貌なのだ。

……兄はどうだったろうか。祖父から譲り受けた豪華な両袖机と、スプリングのよく利いた舶来のベッドと共に、兄の一帳羅である陸軍幼年学校の制服は、僕が兄の持物の中で特に羨望を感じないではいられないものの一つだった。生地は混紡ではあったがかなり上質の羅紗地で、色は緑色がかったカーキ色だった。そのほか型といい、ボタンといい、僕の着ている配給服とは比較にならないように思われた。それに何よりも幼年学校の制服だったという事実が、その服にある特別な雰囲気と、否み難い気品を添えているように感じられてならないのだった。兄もまたその服を愛していた。配給服のくじ引きに加わらないのも、配給服があたってしまったらその服をいつも着ている理由が消滅してしまうからではないだろうかと思えるようなところがあった。

兄は龐大な蔵書の持主だった。それは僕と二人の共同の部屋の壁に填め込んである幅四間の本棚にギッシリと詰まっていた。もっともそのうちで兄が小遣いを割いて買い求めた本というのは、徐々に量を増してはいたが、全体からいえばほんの僅かだった。そのほかは祖父から譲られた改造社の現代日本文学全集と新潮社の世界文学全集各一揃いを除けば、すべて母の従弟、祖父の甥にあたる真彦さんの遺品だったのである。学徒動員で出征する時、真彦さんは持物を全部叔父さんにあたる祖父の家に預けて行った。その時もし戦死するようなことがあったら本

の類は本喰虫の昇ちゃんにみんな進呈するよと冗談のようにいい残して行ったのである。そして真彦さんは本当にフィリピンで戦死してしまい、冗談が遺言となり、その蔵書は兄の所有に帰してしまつたのだ。祖父の家に移り住むようになって間もなく、僕は兄に命じられて、リソゴ箱に詰められて釘づけにされてあつた「真彦蔵書」を本棚に移す作業を手伝つた。どんな本が出て来るか、宝搜しに似た興奮が僕らを包んだ。真彦さんは法律専攻の学生だったのに、蔵書の大部分は文学関係のものばかりだった。ヌードの写真集も出て来た。それを見つけた兄は僕に一言も相談せず、ただちに、焚き始めていた風呂の釜にくべてしまつた。

この兄が後嗣になつてゐる母方の祖父母の家に、僕が預けられたのは中学二年の新学期からだつた。兄の自尊心を傷つけないために、おもてむきの理由は通学の便のためということになつてゐたが、実際はそうではなかつた。幼年学校から復員して来てから心に満たされないものを感じ気が荒れてゐる兄の話相手として、兄の心を和らげ兄の孤独を慰めるために、僕が兄弟の中から適任者として選ばれて派遣されたのである。僕が選ばれたのは、すぐ下の弟で年齢がもっとも近いということもあつたが、僕が兄弟の中で一番心がやさしく気が練れてゐるという祖父や母の判断からも来てゐた。

祖父の家に移つてからというもの、僕はこの自分に与えられた評価に出来るだけ忠実に振舞

おうと努力していた。兄のいうことには決して逆らわず、兄の氣に触らないようにし、兄のよき慰め手、兄のよき保護者たらんとしていた。兄は思ったより氣が荒れていなかった。それどころか僕が来たのを喜んでゐるのか、僕には優しくて親切だった。

祖父や母は、僕が兄のために自分を犠牲にして祖父の家から通学することを引き受けた、と思つていたが、かならずしも事實はそうでなかった。子供の時からの思い出がたくさん結びついている祖父の家に起居出来ることはむしろ僕にとって歓迎すべきことだったのである。しかし僕はそれを祖父や母には氣取られないようにしていた。祖父や母から感謝されていなかったし、自分では使命を託されおのれを犠牲にして兄と一緒にゐるのだ、という悲愴感に酔つていなかったのである。しかし時々僕にはそんな自分が許せない偽善の徒のように思えてならないことがあつた。

僕が移つてから間もなく、兄が僕にベッドを作つてやろうといい出した。それまで勉強は兄の部屋ですることにしていたが、寝るのはベッドがないので、母屋の日本間の一つを使つていたのである。

兄は五歳の時から祖父母の家で育てられたせいか、独り遊びが上手だった。子供の頃週末毎に母に連れられて祖父の家を訪れる時、いつも僕は今度は兄がどんな遊びを創案しているだろ

うか、と楽しみにして行つたものだった。それはあるときは、写真の暗室を利用したへ鍊金術師の實驗室だったり、あるときは木の上に作つたへロビンソン・クルーソーの別荘だったり、裏山の崖に作つたへトム・ソーヤーの洞穴だったりした。

兄についてベッド作りの材料を捜しに物置に入つた時も、僕はそんな子供の頃のことをなつかしく思い出した。昔からその物置に行けば、欲しい物は大体何でも見つかったものだったが、今度もまた兄は必要な材料を全部捜しあてた。

まず兄はほぼ同じ高さの坐り机を二つ見つけ出した。少し高い方は前に、低い方は後ろに置いて、ベッドの足にしようというのである。それから畳大の木の枠、昔引越荷物の梱包に使つたらしい、板をはすかいに打ちつけてある木の枠を引き摺り出して来た。それから古畳一枚も、「これで出来るだろう」と兄がいうと、僕たちは早速それらの材料を外に持出し、速成ベッドを組み立てた。木の枠を二つの机に渡し、古畳を載せると、もうベッドは出来上りだった。

僕が早速試しに寝てみると、

「寝心地はどうだい」と兄がいった。

「ちょっと軋むね。それにスプリングが利いていないみたいだ」

と僕は兄の使っているへ舶来のベッドについている巨大な昆虫の巣のようなスプリングを思い浮かべていった。

「スプリングはベッドの生命だというもののね」

そういいたして、僕は兄の反応を待った。子供の頃いつもそうだったように、兄がこんな場合に何かいいアイディアを思い浮かべてくれることを僕は信じていたのである。

「まあもう一度物置に入ってみよう」しばらくして兄が答えた。

僕たちはまた物置の中へ入って行つた。そして兄はどこからか竹の束を見つけ出して来た。

竹には弾力があるからスプリングの代りになるだろうというのだった。

早速僕たちはその竹を木の枠にある間隔をおいて打ちつけた。畳をその上に載せ再び僕が寝てみると、成程思いなしかスプリングがついたみたいだった。

そのベッドが今僕の使っているベッドだった。相変らずみしみしいところと欠点だったが、寝心地は概してよかった。兄の発案になる竹のスプリングが利いていたのかも知れない。寝ていると敷布団と畳の向うにそれらを支えてくれている竹の弾力のようなものを感じることがあったからである。

僕があゝの〈秘密の儀式〉に耽るようになったのもこのベッドだった。少くともこのベッドだけは僕が毎晩眠りに入る前にあゝの〈秘密の儀式〉に耽らないことはないということを知っているのだ――。